アガペーに出会う（第１回）「条件付きの愛に生きてきた私たち」

聖書箇所：ローマの信徒への手紙　３章 23 節
「**人は皆、罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっていますが、**」

　皆様、おはようございます。今日からしばらく、ウェルカムサンデーの機会に、「アガペーに出会う」というテーマで、６回にわたって福音の中心をたどっていきたいと思います。私がこのテーマを扱おうと思ったのは、私自身がアガペーと出会う経験をしたこと、それによって、教会とはアガペーに満ち溢れるべきところであるという確信に至ったこと、そして、アガペーに出会うことによってこそ人は救われるということ、まことの「心の回復に至る」ということを分かち合っていきたいからです。

　“アガペー”とは何か――これはギリシア語で「無条件の愛」を表す言葉です。でも、私たちはこの「無条件の愛」を、なかなかすぐには実感できません。むしろ私たちの多くは、“条件付きの愛”の中で育ち、それに従って人と関わるようになってしまっているからです。たとえば、こんな言葉を聞いたことはないでしょうか。

「ちゃんとしなさい」
「約束を守れない子は嫌われるよ」
「そんなことしてると見捨てられるよ」

これらの言葉には、ある共通のメッセージが込められています。それは、「あなたが〇〇でないと、私はあなたを受け入れない」ということです。つまり、**条件を満たさないと愛されない、という前提**。こうした条件付きの愛を、私たちは親子関係の中で、兄弟姉妹との関係の中で、学校や社会の中で、たくさん経験してきたのではないでしょうか。もちろん、それは全てが悪意から出たものではありません。でも、その中で知らず知らずのうちに、私たちは「人は評価されてこそ、受け入れられるものだ」という考え方を心に刻み込まれていったのです。そして、この“条件付きの愛”の価値観を、自分自身にも他人にも当てはめるようになります。

「頑張ってる人は好きだけど、怠けてる人はちょっと苦手」
「ちゃんとルールを守らない人を見ると、イライラする」
「あの人は空気が読めないから、距離を置きたい」

そう思ってしまうのは、私たちが「愛されるにはこうでなければならない」という基準を内側に抱えているからです。そしてその基準で、自分も他人も裁いてしまう――そういう現実があります。

聖書は、こうした人間のありのままの姿を隠しません。ローマ人への手紙３章23節には、こう書かれています。

「人は皆、罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっています…」

「罪」という言葉をどう理解するか、どう伝えると人に理解してもらえるか、私は長年考えてきました。自分は犯罪を犯したことはないし、倫理的に間違った生き方をしてはいないという人も、決して少なくはないはずです。しかし、私たちが「条件付きの愛」によって人間関係にもたらしている「歪み」を考えるとき、これを「罪」と呼んでみると、大変理解しやすくなるのです。

この「罪」とは、ただ悪いことをした、という表面的な意味ではありません。もっと深く、人が神の本来のかたちから離れてしまっている、という状態を指しています。そしてその根にあるのが、「条件付きの愛に縛られ、神や人との関係をゆがめてしまっている現実」なのです。

なぜ、罪ある人間は「神のかたち」から離れてしまっているのでしょうか。それは、神が「アガペー」であられるからです。ヨハネが言う「神は愛なり」（Ⅰヨハネ4:8）とは、まさにそういう意味であり、ここでは「アガペー」という語が使われています。すべての存在を丸ごと受け入れ愛しておられる方。そこに条件は存在しないのです。それは、神が「創造者」であられることとも深く関わっています。ご自分で造られたものを愛する、これは言わば当然のことかもしれません。しかし、私たち人間にはこの「アガペー」が生まれつき具わっていないのです。いえ、もしすべての人から「無条件の愛」を受けて生きられるのであれば、私たちもまた「アガペー」を宿す存在であったかもしれません。ですが、現実は「条件付きの愛」しか知らない人間で満ちた世界であり、そこで生きているだけで、私たちは否定的な言葉を次々と吸収していってしまいます。そして、吸収したものを、また誰かに向けて発信していく。この「負のスパイラル」が起きているのが、私たちが生きる世界なのです。

私の小さな経験を一つだけお話しさせてください。これは、「私の中ですでに乗り越えた物語」としてお話しするものです。私は子どもの頃、カブトムシに対する深い憧れを持っていました。幼い頃から昆虫が大好きで、ボロボロになるまで昆虫図鑑を握りしめていました。そこに載っている、立派な顎を持ったカブトムシの写真を毎日見つめ、いつか本物と出会いたいという夢を見続けていました。

小学３年生の頃だったと思いますが、夏休みに信州のバイブルキャンプ場に家族で泊まったことがあります。宣教師の方が経営していて、朝ご飯に焼いてくださったヨーグルト入りのパンケーキが本当に美味しかったのが忘れられません。そして、その施設にいた「お兄さん」が、何と７匹カブトムシの入った虫かごをそのままプレゼントしてくれたのです。私の心の中で花火がボンボンと上がっていました。そのお兄さんと「大事にするよ」と約束をし、帰路に着きました。

しかし、私はカブトムシの扱いを知らなかったのです。愚かにも、車のトランクの中に虫かごを入れて帰ったため、家に着いたときには全部暑さで死んでいました。激しい悲しみと悔しさで泣いているとき、父から決定的な言葉を浴びせられました。「バカだねぇ！」「本当にバカだねぇ！」と。私はやり場のない気持ちを誰かに受け止めてもらいたかった。でも、その言葉によって、自分は「カブトムシが暑さに弱いことすら知らなかった――そんな自分は、受け入れてもらえないんだ…」という無意識の自己否定感が深く根づいてしまったのです。

このような経験は、潜在意識の中で、他の誰かに対しても同じことを求めるという形で現れてしまう。私がその後の人生において、どれだけ多くの人を裁いてきたか、それを「罪」と呼ばずして何と呼ぶのでしょう。まさに「神のかたち」の損なわれた人生を長らく歩み続けることになったのです。

私たちは、ほんとうは「愛されたい」だけなのです。失敗しても、弱くても、「それでも大丈夫だよ」と言ってほしい。でも、それを言われたことがなくて、自分を偽ってきた。愛されるために頑張りすぎて、本当の自分がわからなくなってしまった。その痛みを知っているのが、私たちです。そして、その痛みに一番深く寄り添ってくださるのが、**神様**です。神様は、そんな私たちの弱さを知ったうえで、なおも私たちを愛しておられます。条件付きの愛に傷つき、誰かを傷つけてしまった私たちに、「もう一度やり直せるよ」と語りかけてくださるのです。アガペーとは、**できたから与えられる愛**ではなく、**そのままのあなたに注がれる愛**です。

このシリーズでは、そんな無条件の愛――アガペー――と出会っていくプロセスを、６回にわたって一緒にたどっていきたいと思っています。次回は、「罪という名の痛み」というテーマで、さらに私たちの内面にある葛藤を見つめていきます。でも、そこにこそ、癒しの扉があります。神様が、あなたの心の奥深くに触れようとしておられます。今週もその御声に耳を傾けながら、日々を歩んでまいりましょう。

【祈り】

　愛なる天の父なる神様。私たちは今日、「条件付きの愛に生きてきた私たち」というテーマを通して、自分の心の奥深くにある傷と向き合いました。評価されなければ価値がないと信じ込んでしまった自分。人を裁き、そして自分をも否定してきた歩み。そのすべてを、あなたの御前に差し出します。でも、あなたは言われます。「そのままのあなたで、よいのだ」と。アガペー――無条件の愛によって、私たちを包み、赦し、受け入れてくださる主よ。その愛の温もりが、私たちの心にしみわたり、今日からの歩みを変えていきますように。どうか今週、私たちが出会う一人ひとりに、あなたの愛を届ける器とならせてください。条件ではなく、存在そのものを愛する心を育んでください。まだアガペーを知らない人に、私たちを通して、その香りが届きますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

あなたのすべてをご存知でありながら、なお深く愛してくださる――
父なる神の限りないアガペーと、

私たちの罪と傷をその身に負い、
「それでも、あなたは愛されている」と告げてくださった――
主イエス・キリストのあわれみと、

どんなときにも私たちの傍らにいて、
心に癒しを与え、真実の愛へと導いてくださる――
聖霊の親しい交わりが、

ここに集うお一人おひとりと、そのご家族の上に、
今も、これからも、とこしえまでも豊かにありますように。

アーメン。